

大麦管理情報 (第9号)

令和8年5月1日
農業技術課広域普及指導センター

1 気象経過

- (1) 3月：平年に比べ、平均気温は7.9℃（平年差+1.0℃）と高く、降水量は94.0mm（平年比57%）とかなり少なく、全天日射量は14.3MJ/mm/日（同119%）とかなり多かった。
- (2) 4月：平年に比べ、平均気温は14.3℃（平年差+2.0℃）とかなり高く、降水量は131.5mm（平年比98%）と並、全天日射量は16.2MJ/mm/日（同102%）と並であった。

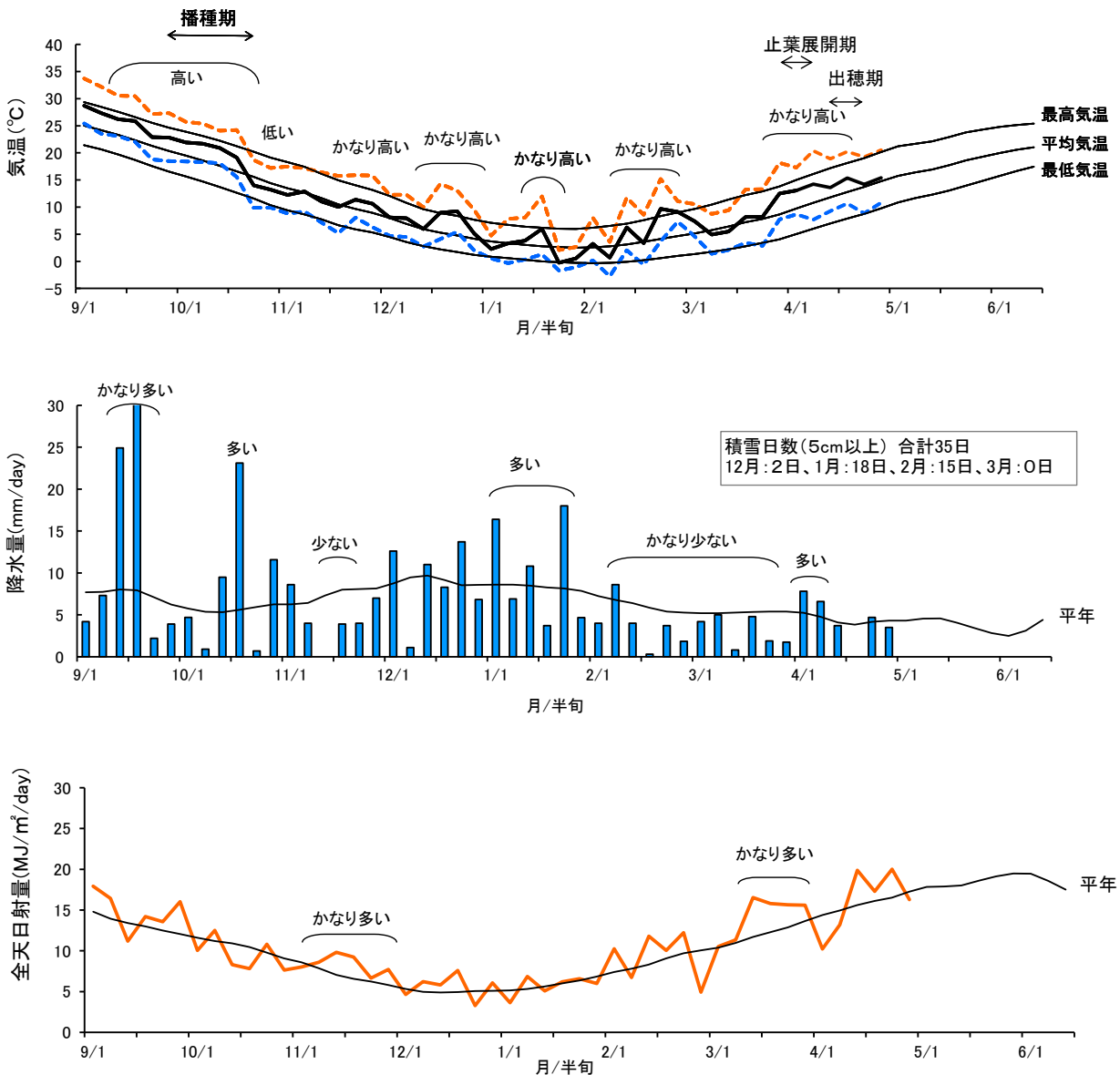


図1 令和8年産大麦生育期間の気象経過 (富山地方気象台)

2 生育概況

- (1) 平年に比べ、草丈は並（平年比98%）、 m^2 当たり茎数は少なく（同比85%）、葉色は淡く（同差-3.7）になっている（表1、図2、3）。ただし、ほ場や生育ステージにより差がみられる。
- (2) 平年に比べ、穂長は並（平年差+0.0cm）、出穂期は早いところで4月11日頃、平均で4月13日頃と平年に比べ2日早くなっている（表1、2）。
- (3) 今後、平年並（H28～R7）の気温で推移すると、4月13日頃に出穂したほ場の成熟期は5月29日頃と見込まれる（表2、図4）。

表1 大麦の生育観測ほ等の生育状況（5月1日）

年産	播種期 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	穂長 (cm)
			(本/株)	(本/ m^2)			
R8年産	10/6	83.1	2.5	374	14.3	42.4	4.6
R7年産	10/2	82.8	2.5	429	15.0	47.1	4.5
平年	10/6	84.7	2.5	441	13.8	46.1	4.6

注1) 調査ほ場数：10、播種様式はすべてドリル播き

注2) R8年産の値は10月下旬播種を除いた平均、平年はH28～R7年産の平均（図2、3、表2も同様）

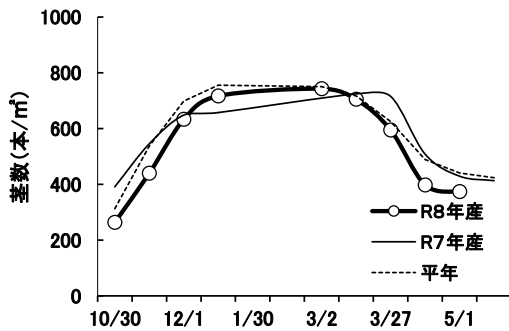


図2 茎数の推移

注) 平年はH28～R7年産の平均

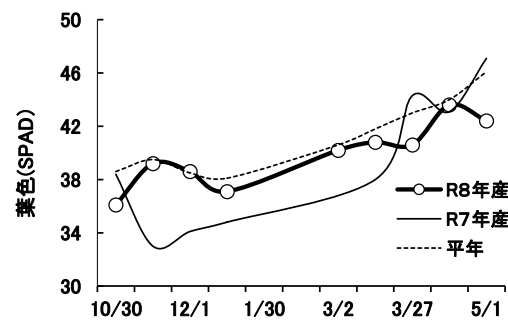


図3 葉色の推移

注) 平年はH28～R7年産の平均

表2 生育ステージ及び成熟期見込み（5月1日現在）（月/日）

年産	播種時期	止葉展開期	出穂期	成熟期
R8年産	10月中旬まで	4/3 (3/31～7)	4/13 (4/11～16)	5/29
	10月下旬以降	4/8～9	4/19	6/1
R7年産	10月中旬まで	4/10 (4/6～19)	4/20 (4/17～27)	6/2 (5/30～6/6)
平年		4/4	4/15	5/30

今後気温が平年に比べ
1℃高く推移した場合、
成熟期は5月28日頃が
見込まれる。

注1) R8年産の成熟期は出穂期ごとの積算気温（図4）を基に、富山地方気象台の日平均気温

（4/30まではR8年値、5/1以降はH28～R7年平均値）を用いて算出した予測日

注2) () 内は、生育ステージのほ場による幅を示す。

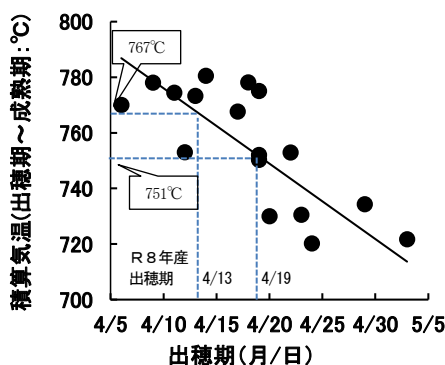


図4 出穂期と成熟期までの積算温度の関係

注) H20～R7年産生育観測ほの平均値

積算温度は富山地方気象台の日平均気温を使用

3 当面の技術対策

(1) 排水対策

- ・登熟条件を良好にするためには、根の健全化が重要であることから、再度、排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底する。
- ・用水や隣接田からの漏水を防ぐため、水口や畦畔を点検し、湿害を確実に回避する（写真1）。



写真1 隣接田から漏水しているほ場

(2) カラスノエンドウ種子等の異物混入防止

- ・実需者からは異物混入防止の徹底が強く求められているが、カラスノエンドウの種子やハマダイコン（アブラナ科越年生）の莢が製品に混入する事例がみられる。これらが収穫物に混入すると選別・除去が困難である（写真2、3）。
- ・カラスノエンドウやハマダイコンがほ場内でみられた場合、種子が稔実する前に早期に抜き取る。なお、畦畔のカラスノエンドウは、ほ場侵入前に確実に除去する。
- ・収穫前に、ほ場内のゴミ（空き缶やペットボトルなど）を確認し除去する。



写真2 カラスノエンドウと種子

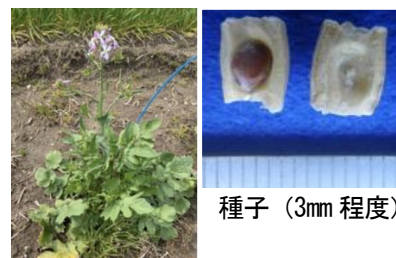


写真3 ハマダイコンと種子

(3) 赤かび病等被害粒の混入防止

- ・検査規格における赤かび粒の混入限度は0.0%と厳しい基準となっているため、刈取り直前に必ずほ場を巡回し、赤かび病等の発生の有無を確認する。
- ・赤かび病等の発生がみられるほ場は、別扱いにして、被害粒の発生していないほ場の後に刈取るとともに、荷受時のチェックを徹底する。

(4) 適切な刈取作業の実施

- ・播種時期等により、地域やほ場によるばらつきが大きいことから、必ずほ場ごとに成熟期を確認する。
- ・近年、登熟期間中にフェーン等が発生し成熟期が早くなる場合があることから、コンバインや乾燥調製施設の準備は早めに行う。
- ・穂軸、茎葉が完全に黄化し、子実水分30%以下となったほ場から刈取りを開始し、刈遅れないように注意する。
- ・早刈りは粒の充実が不十分で空洞粒となりやすい。また、刈遅れは収穫ロス的重要因素となるとともに、降雨により色沢が低下するため、穂首が折れる前に刈り終わる。
- ・ほ場内の熟期の差が大きい場合は、空洞粒の発生が懸念されるので別扱いとする。
- ・刈取り後は、直ちに（4時間以内）乾燥機に張り込む。

(5) 適正な調製作業の徹底

- ・刈取り前に乾燥調製施設の清掃・点検を徹底するとともに、選別の徹底により、異物や被害粒を確実に除去する（写真4）。
- ・整粒歩合80%以上に上げるため、2.3mmの篩目を使用し適正流量を守り、細麦等を除去する。
- ・容積重690g/L以上を確保するため、脱芒等を丁寧に行い精選する。



写真4 異物の混入事例
左：プラスチック片、右：ゴム片